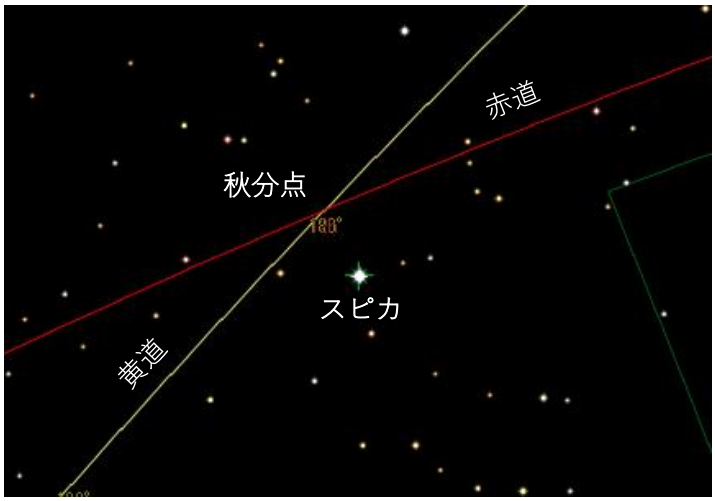
真珠星「スピカ」

春の夜空を飾る3つの一等星のなかで一番遅く上ってくるのがおとめ座の「スピカ」です。21個ある一等星の中では16番目（1.0 等級）と目立たない星ですが、農業の女神デメテルが持つ麦の穂先にあることからプラネタリウムではこの星は「麦の穂」とか「とげとげしたもの」というように紹介されます。また、色が白いことから真珠を思い起こさせるのか「真珠星※」の名で呼ばれることもある解説での定番の星といって良いでしょう。（※真珠星という名が付けられたのは、1940年代以降です。）



西暦330年の秋分点とスピカの位置
アストロアーツ ステラナビゲータで再現

スピカという名の起源は紀元前8世紀のギリシャにあるといわれます。初めて農業のための暦を作った哲学者ヘシオドス(生没年不明)が、プレアデス、オリオン座と並んでスピカをヘリカルライジング（太陽が昇る直前に東の空に現れる時期で季節を知る）の星として用いたことによります。そのため農業を象徴する星となり、穀物の穂を意味する名前が付いたと考えられています。そこに農業の女神の姿を「おとめ座」としてあてはめたのが後か先か、同時にできたのか定かではありません。

太陽が春分の日にある点を春分点といい、現在はうお座にあります。その反対が秋分点でおとめ座にあります。今は大分ずれてしまいましたが、西暦330年頃にはスピカは秋分点のすぐそば（角度で3°ほど離れていました）にありました。明るい星が秋分点のすぐそばにあるということは、現在のわれわれが天の北極の近くに北極星を持っているようなものです。かつては、天体観測にとても便利な「秋分星」でもありました。

2021年5月 7 日記（解説員：田部 一志）